

# 「作家批評」の復興と変容

——当代中国における作家の大学駐在制度を視座として——

裴 亮

## はじめに

近年中国において、文芸批評のアカデミズムが持つ限界と困惑について議論し、今日の批評が持つ影響力を再考することは、評論界と学術界がともに注目する旬の話題である。他方、学者による文芸評論が徐々にその無力さと形骸化を露呈したのと対照的に、第一線で活躍する多くの作家たちが、一九九〇年代半ばから文芸評論に携わるようになり、評論界へ進出するという現象は現在の中国文壇において一つの継続的な潮流にもなった。ここで注目すべきは、こうした作家による批評活動のブームの発生とほぼ同時期

に作家の大学駐在制度（ライター・イン・レジデンス）が台頭し始めたこと、そしてそれと関連するマスコミによる宣伝が活発になされたこと、この二つの要因がその潮流の拡大を促進したことである。一九九〇年代以降、王蒙、莫言、王安憶、閻連科、余華、劉震雲、畢飛宇等を筆頭に、多くの著名作家が大学教員として大学に駐在した。彼らは大学で創作活動を行うと同時に、専門講義を開く形で大学生に自らの創作経験を伝え、名作に対する個人的な解釈を語り、さらに講義録を出版するなど、様々な形で文芸批評に携わった。これは大学の教育改革における新たな試みとなっただけでなく、従来の文芸評論に革新をもたらすと同時に、文芸批評の影響力を復興させる現象でもあった。

現在、「作家批評」についての研究は、主にその定義、価値及び方法を構築するといった理論の側面に集中している。一方、「作家批評」に関する資料の整理作業及びそれに基づいて各作家が持つ批評風格を究明する研究が多くみられる。しかし、作家駐在制度のような、外部からの働きについての考察は十分に議論されていない。この外部からの働きとは、具体的な組織と制度（例えば中国作家協会、大学の文学研究所など）を指す一方、批評活動を育む背景、行方方法、発展する過程といった広義的な要素も含める。文芸批評がもし個人による私的行為ではなく、集団的な動きで行われた場合、その運営の仕組みや関連する政策などは文芸批評の主体の独自性と深く関係すると筆者は考える。制度という側面から「作家批評」の復興とその変貌を討論する際、以下のような一連の問題に直面することが予想される。大学の新たな改革方策としての作家駐在制度はどのように誕生したのか。批評者としての作家駐在作家たちは、どのように文学教育と連携し、新たな批評形式を作り出したのか。アカデミーの中から誕生したにもかかわらず、アカデミズムと一線を画した「作家批評」は、現在の文芸批評の構造をどのように変えたのか。これらの問いの解明にあたって、重要なのは批評を行う主体だけではなく、その背後に働く組織や制度といった外部の要因に注意を払うことであろう。そこで、本論文は一九九〇年代か

ら中国に現れた作家の作家駐在という現象を手がかりに、特に文芸批評に関わる「制度」に着眼し、新世紀以降大潮流となった作家の作家駐在制度が、何故作家批評の集団的「復興」を引き起こしたのか、またどのようにそれを推進したのかを究明することを試みる。

## 一 批評の「形式」——創作談から講義録へ

大学の「駐在制度」はどのように現代作家の批評活動の展開へ影響するのだろうか。これを検討する前に、「作家批評」の定義、またそのジャンルにおける表現様式及び出版形態に関して、これまでの歩みを整理する必要がある。

「作家批評」とは評論のスタイルによる区分ではなく、批評者の文化的身分によって確立した概念である。フランスの批評家アルベール・ティボーデ (Albert Thibaudet, 1874-1936) は著書 *Physiologie De La Critique* に「おこい」批評者の身分によって文学批評を讀者批評、学者批評、作家批評という三つの種類に分けた。ティボーデは、作家批評とは作家が自らの文学才能を駆使し、作家の姿勢と思考に基づいて行う批評活動であると定義づけた。実証的で理論性の強いアカデミーの批評と比べて、作家批評の多くは、作家自身が持つ人生体験や創作経験及び文学に対する考えと結びつきながら、文学創作のあり方を探求するものであ

る。また、文学作品を生み出す側の視点から、様々な文学現象についても見解を述べる。したがって、その批評は多様性と文学性に富んでいる。

文芸評論の発展史から見れば、中国古典文学の評論家の多くは作家出身であり、批評する際にも直感性と印象的な特徴を持っていた。批評の形式として、随筆、書評、批点などが多く使われ、表現も文学性の強い詩話と詞話がよく見られる。このような批評は一種の文学創作と言えよう。

現代では、大半の作家が文学批評活動に携わったことがある。彼らの談話集、書簡集、回想録、または書評なども貴重な文芸批評として見なされてきた。改革開放以降、作家たちは文学批評を行うことによって、当時の文壇に存在する様々な文化思潮に対して考えを述べると同時に、文学研究においても作品についての新しい解釈や新たな背景資料を提示した。このような「作家批評」は主に三つの形式を呈している。一つは、自身の創作についての雑談、またはそれに対して自らの見解を述べる「創作談」である。二つ目は、著名作家や名作に対して感想を述べる「読書筆記」である。三つ目は、新世紀に入ってから、作家の大学駐在制度の台頭に伴って出現した「講義録」である。

「批評の時代」と言われる一九八〇年代において、新鋭作家たちの創作活動が活発化したとともに、一つの顕著な現象が現れた。それは多くの作家たちが新作を発表する

際、作品と同時に説明的な文章を添えることである。彼らはそれによって作品の創作経緯を読者に伝えようとした。こうした作家による説明文は、「作家が作品の創作背景、

創作体験についての感想、作品に対する理解を綴る文章」であり、「主に記述と評論が混じり合った形で、自分の生活や文学観念についての考えを語る」ものである。<sup>(4)</sup> 個人的な価値観や人生観を材料とする文学創作について語る「創作談」は、典型的な「作家批評」だと考えられる。さらに、作家による自序、跋、書評及び雑誌で掲載された「作家書簡」のような創作と関連する文章は、一種の創作談と見なすことができる。「創作談」が持つ現代文学批評における意義に関して言うならば、それが従来とは異なる角度から創作者の視点で文学作品を論じるという「作家批評」の属性を提示した点を指摘できよう。さらに、そこには作家と作家、作家と読者、作家とマスコミの批評観念が互いに呼応した痕跡が含まれている。それによって、我々は八〇年代の文壇に存在した「創者―编者―読者―評者」という一連の交流の「現場」を目の当たりにすることができる。同時に、それは作家批評の「場」の誕生を考察するにあたって、多くの手がかりを提供した。

九〇代以降、「作家批評」は新たな発展を迎えた。その変化として、作家たちは批評活動に積極的に関与すると同時に、批評の理論的構築においても研究を重ねるよう

なった。残雪、馬原、余華、格非といった新鋭作家たちはその代表である。彼らの創作から批評への移行について、葉立文はつぎのように指摘する。「現実主義文学の規範を動揺させた後、自らの創作経験に頼って、文壇の秩序を変えようとした。(中略) この目標を実現させるため、多くの新鋭作家は小説の創作活動から、一斉に文学批評活動へと転じた」。残雪の『靈魂の城堡——理解卡夫卡』『解読博尔赫斯』『芸術復讐』、王朔の『無知者無畏』、王蒙の『行板如歌』、馬原の『閱讀大師』、余華の『我能否相信自己』及び格非の『塞壬的歌声』など、多くの評論集がほぼ同時期に出版された。これは組織的に、計画的に行われたことではなかったにしても、事実上、一つの潮流を形成させたと言える。また、王安憶が一九九七年に出版した小説批評に着目した著作『心靈の世界』は、彼女の創作体験から出発し、作家の視点で創作理論について論じられている。この時期における小説理論に関する傑作の一つに挙げられよう。

注目すべきは、八〇年代の文学刊行物で発表された断片的な「創作談」と比べて、上述した文芸批評の多くが「文学筆記」や「読書筆記」として位置づけられたことである。それらは昨今の各国の名作を鑑賞する形で多様な視点から分析を行い、体系化と専門性もより顕著になった。改革開放の背景から考えると、欧米の影響を受けた中国の文

学評論界は積極的にそれと同調しつつ、文学評論の独立性と学術性を追い求めてきた。しかし、批評の方法論や学術性や理論性を過度に追求した結果、批評活動は文学からかけ離れた性格を持つようになった。一方、市場経済の発展やメディアによる情報の普及とともに、文学が持つ本来的な教育性が弱まり、娯楽性が重要視され、その社会的地位も徐々に低下した。それに伴い、作家の文学創作に対する姿勢や見方も変化した。このような言わば「追い詰められた」局面のもと、九〇年代の作家たちの「読書筆記」はあえて「職業的」な視点から批評の形式と創作経験に執着して、「文学性」と「創作性」に富んだ文芸批評を積極的に生み出した。それはまさにアカデミーの「論理性」の強い批評に対する反抗と糾弾であった。

## 二 変化する「制度」

### ——作家の大学駐在と「文学共同体」の再建

八〇年代の作家の「創作談」と九〇年代半ば以降の作家の「読書筆記」は、あくまで作家個人が行う独立的な批評活動にすぎないと思われる。これに対して、二〇一七年二月に人民文学出版社から出版された「大家談大家叢書」は、作家たちによる文芸評論集が「集団的」に現れた一つの典型的な事例であると言えよう。このシリーズは畢飛

宇、馬原、蘇童、張煒、王家新などの有名作家の文芸批評を数回にわたって出版した。編集者を務めた南京大学の丁帆と王堯は叢書を計画した動機に関して、序文で次のように述べている。

現在、多くの大学の文学院、または中国文学部は多くの有名作家を招聘し、大学の教育と研究に参加させた。それによって、「中国文学部は作家のゆりかごではない」という大学伝統の呪いを打破した。これらの作家たちは単なる大学の「飾り物」ではない。彼らは大学教育にどのような働きをもたらすのか。彼らはどの側面において文学教育の現状を変えるのか。彼らは大学の人文教育にとつて、どのような意義を有するのか。これらはすべて避けて通れない問題である。実は、これは現代中国の大学の伝統の一つであり、我々がよく知る現代文学の巨匠の多くは、有名大学の教授職をも務めている。この伝統は二一世紀においても受け継がれ、存在している。十年前、復旦大学の中国文学部は、王安憶を創作学科の教授として招聘した頃から、効果的な文学教育の方法を探求し始めた。近年も多くの大学が駐在作家を招聘している。北京師範大学は、ノーベル文学賞の受賞作家、莫言が中心となる国際創作センターを設立した。また蘇童も北京師範大学へ転入した。閻連科、劉震雲、王家新な

ども中国人民大学の文学院へ着任した。<sup>⑥</sup>（傍線筆者、以下同様）

丁帆、王堯は序文で計画の目的を明確に説明したわけだがそれは同時に読者たちに向けて、現在の作家批評が持つ新しい現象と傾向を提示したと言える。作家の大学駐在制度の発展によって、作家による文学批評活動への主体性が高まり、その副産物として批評の形式は変化し、また読者の受け止め方も変わったのである。

一九九〇年代以降、欧米の大学が行った「大学駐在作家の創作計画」や「アイオワ国際創作ワークショップ」及び「創意創作カリキュラム」のような計画から影響を受け、作家の大学駐在制度は中国においても密かにブームとなった。作家の文学創作と大学の専門教育を連携させるため、復旦大学文学院は王安憶を招聘し、学内で「MA Creative Writing」という講座を開設した。二〇〇二年、作家の王蒙は中国海洋大学文学院の院長に就任し、そこで本格的な「作家大学駐在制度」を設立したほか、十年余りの間に畢淑敏、余華、遲子建、張煒、鄭愁予、賈平凹等の小説家や詩人を駐在作家として招いた。<sup>⑦</sup>二〇一〇年十月、中国人民大學は国際創作センターを設立し、小説家の閻連科と劉震雲、詩人の王家新を駐在作家として招くと同時に、「創作学」のカリキュラムを開設し、学生の募集も行った。<sup>⑧</sup>この

他、作家の莫言は北京師範大学からの要請のもと、長期的に専属の駐在作家を務めるとともに、北京師範大学国際創作センターを設立した。二〇一三年三月、南京大学は小説家の畢飛宇を招聘して教授に任命し、文学講座を開設した。

右の例はあくまで氷山の一角に過ぎない。ここからわかるのは、作家の駐在制度がすでに多くの有名大学に導入されたということである。これは、今日の大学が文学教育に新たな試みと改革の方策を取り入れた新しい展開というより、むしろ中華人民共和国建国以前からすでに存在していた、「現代作家」が大学に駐在するという伝統が「継承」された現象と見る方が適當だろう。実は、大学が作家を招聘し、教育者として働かせる現象は五・四運動期まで遡ることができる。一九一六年、北京大学の学長に就任した蔡元培は「思想自由」「學術平等」「兼容並包」といった教育方針を強く推進して、胡適、劉半農、周作人等の作家たちを果敢に起用し、北京大学で教職を務めさせた。それによって、北京大学と雑誌『新青年』を拠点とした「文学革命」の勃発を促進した。五四新文化運動の時期、魯迅を筆頭に、朱光潜、林語堂、謝冰心、朱自清、聞一多、沈從文、徐志摩、錢鍾書など、多くの現代文学の巨匠が、清華大学、燕京大学、武漢大学などの名門大学で教鞭を執っていた。中国国内において初めて完備した作家駐在制度を設

立した中国海洋大学の前身は、一九二四年創立の私立青島大学である。老舍、王統照、梁実秋、馮沅君等の作家もそこで教職を務めた。こういった作家と教員の二重身分を持つ現代知識人たちが教育に身を投じ、真摯に教育活動に取り組んだからこそ、文学の才能と志向を持つ多くの後継者を育み、中国の現代文学は活発な発展を迎えたのである。いち早く中国国内で国際創作センターを創設した中国人民大学は作家による文学教育の長い伝統を持っている。その文学院の院長孫郁は作家駐在の伝統について、以下のよう

に語った。

（人民大学の）前身、延安魯迅芸術学院には多くの有名作家が集結した。丁玲、艾青、孫犁、何其芳などの作家は文学教育に多くの面白い経験をもたらした。（中略）人民大学はかつての伝統を再び取り戻した。作家の駐在制度を設立するのは、大学の文学教育を豊かにするためにであり、単一化に向かいつつある教育体制に対して、活気を取り入れるためでもある。

筆者の調査によれば、現在中国国内において、大学の作家駐在制度の実施は主に三つの形で行われている。その一は、大学は正規の人事手続きを経て、作家を専門教員として大学で雇い、創作活動と教育研究活動を並行して行わせ

る（例えば復旦大学、人民大学、南京大学等）。その二は、作家を非常勤講師や客員教授として招き、集中的に短期的な大学教育活動に参加させる。つまり、正規人事外の雇用である（例えば北京師範大学、中国海洋大学等）。その三は、短期間の「駐在創作プログラム」または「作家講演プログラム」を開催することによって、作家を大学に招き、講演会や研究会を開講させる（例えば首都師範大学、華中科技大学等）。右記のような多様な状況からも、文壇と大学を繋いで共同人材を育てる新体制としての作家の大学駐在制度は、まだ模索の段階にあることがわかる。一方で、大学が作家駐在制度を設立する最も主要な目的は、文学教育の充実と普及を図ることであり、またそれによって、大学の教育方針に対し抜本的な調整を行おうという点である。北京師範大学国際創作センターの学者、張清華がインタビューで答えたように、「駐在作家を招く目的とは何か、それは形式的なものではなく、決してそれを利用して、大学が見栄を張ることでもない。その真の目的は、従来の教育理念を改革することであり、教育の構造を根本的に変えることである。それによって、文学創作能力の養成を一種の慣例や体制として確立させ、さらに教育全体の革新を引き起こすのである」<sup>⑩</sup>。

実践の結果からみれば、作家の大学駐在制度が大学に与えた影響は総合的なものである。まず、作家の文学的素

養、文学知識、創作経験、考え方は大学生に継続的な影響を与えることができる。例えば、詩歌研究者の羅振亜は、首都師範大学の駐在作家たちに対する長期的な観察と分析によって、作家駐在制度がもたらした以下のような新たな現象の出現を指摘する。「首都師範大学中国詩歌研究センターのかつての卒業生たちは、駐在詩人の人間性や作品との度重なる交流と論争を経て、駐在詩人たちが主催した多くの学術活動の試練に耐え抜き、博士課程の卒業生の孟沢、博士課程在籍の霍俊明、張立群、張大為、王士強、連敏、崔勇、龍楊志、馮雷、林喜傑、王永、羅小鳳、陳亮を主要メンバーとする詩歌批評家グループが次第に形成された」<sup>⑪</sup>。他方、大学の学術的環境、大学生たちの文学に対する情熱、また文学作品に関する読み方も、駐在作家たちに新しい刺激とインスピレーションを与えうる。作家の遲子建はその作品『額尔古纳河的右岸・跋』において、自らの駐在作家としての経験が如何に文学創作に結びついたのか、具体的な例を挙げている。

初稿が完成した後、王蒙先生のお招きを受け、私は青島にある中国海洋大学へ赴き、原稿の修正を行った。私はその大学の駐在作家である。海洋大学は私に便利な生活を提供した。私の小説の中に出てきたエヴェンキ人の先祖はラム湖の畔から出てきた。彼らは最後にアルグン

川の右岸にある山林にたどり着いた。しかし、この長篇

小説を最終的に書き終えたところは、美しい港町の青島である。私の小説中の人物は、私とともに山から海へ

帰った。それはまるで宿命的な旅路のようだ。(中略)

青島にて、私はイフリンの運命について大きく書き直した。私は風に彼女の心の中の世俗的な怒りを払拭させ、花々を食べ物にし、彼女のお腹に溜まった汚れた脂を洗い取り、彼女に安らぎの清らかな最期を与えたい。それが合理的な結末であろう。この点から、私は海によって啓発されたことに感謝しなければならない。

引用からは、作家が大学に駐在することによって、大学やその地域の文化、そして大学の教師と学生たちとの交流を通じて、自分の作品を客観的に見つめ直す様子が窺われる。ほかにも、作家自身が自作の「不足」や「欠点」などに気付き、これからの文学創作の展開と方向について明確に考えることもできていることがわかる。作家を媒介とする駐在制度は、作家の文学活動と大学の文学教育を繋ぎ、大学の授業の内と外を連携させ、また理論と実践の交流を実現させた。それは単一化に向かいつつあるアカデミーの教育体系に豊かな文化を注いだのである。結果的に、作家駐在制度は大学における文学創作の環境を営み、文学批評の「場」を創出させ、授業の内外をまとめる「文学共同

体」を育成したと言える。

### 三 変容する「批評」

#### ——「授業・評論」の連動と「作家批評」の復興

作家駐在制度によって形成された「文学共同体」は大学の授業に独特な影響を与えている。前節で触れた文学創作と教育活動の「相互的な効果」以外、もう一つは文芸批評の「臨場感」である。

#### (一) 授業としての批評の現場

「場」というのは、本来物理学の定義であり、実在した空間の範囲内で行動する場所をいう。空間という言葉が持つ意味合いの広がりに伴い、「場」という言葉が徐々に抽象化されて、記号的な側面が強くなった。今日では一般に、言語によって構築された想像的空間と記号的空間を指す。一方、「臨場」とは西洋現代哲学の範疇の重要な概念の一つであり、「人、物、またはあることが持続して存在し、その存在は実際に見ることができ、感じ取ることもできる」<sup>(1)</sup>意味を持つ。この概念から従来の中国の大学における文学教育の実態を振り返れば、知識系統の核心的位置を占めるのは文学史の研究であり、その対象は主に歴史上すでに発生した文学的事件と運動が今日の文学に与えた影響



であることが発見できる。それに対して、文学教育の中心から離れた位置におかれているのは文学批評であり、その研究対象は主に現在発生したばかり、もしくは進行中の文学現象である。研究対象の時から見れば、前者は過去の完了形であるのに対して、後者は現在の進行形である。研究の方法としては、前者が歴史をたどって、科学的な客観性を重んじて実証を探すのに対し、後者が現在の文学現象に関する論評を行い、感覚と体験を重視する。大学の学者は、文学を専門知識の一つとして解釈し、それを学生に講義する。一方、大学の駐在作家は、常に「文学を芸術として、学生たちにより直感的で体験的な方法で教育を施す。それによって、学生たちに間近で文学創作の苦しみや喜びを味わってもらい、緻密に文学を感じさせる」<sup>15</sup>。授業中に、作家が教室で文学の「現場」を作り上げ、それを学生たちに提供するのである。

二〇一七年、畢飛宇の新作『小説課』の成功は現在駐在作家の「講義録」式批評が読者と学術界の両方から認められた好例である。それはアカデミーの批評が持つ合法性の危機という問題に重要な参考材料を提示したと言える。『小説課』は人民文学出版社と江蘇明哲文化发展有限公司によって、共同で計画した「大家談大家叢書」の第一作でもあった。その中に収録された内容は、畢飛宇が南京大学の教員として学生たちと古今東西の名作小説について語り

合った授業のテキストや討論の記録である。一連の講義原稿は、後にコラムの形で『鍾山』や『文芸報』などの雑誌で連載されたこともあった。一度発表されたものが再び編集され、単行本として再度出版されたことは、畢飛宇の批評が持つ魅力と影響力を改めて証明したと思われる。また、このシリーズを『小説課』と命名した理由について、畢飛宇は次のように述べた。「一人の作家として、創作の時はそこまで意図を明確にしているはずではなく、かなり混沌としている。しかし、教育者となれば、意図をはっきりとしなければならぬ。学生たちにそのすべての言葉を理解させるほど明晰でなければならぬ」<sup>16</sup>。要するに、著者は自分の創作時に有した二重の身分と、編集時の目的に対する明確な考えを持つていたことを表している。一方、「授業」の制限によって、自分の批評がどのような影響を受けて成立したのかということに関して、畢飛宇は『小説課』の後書きで次のように記している。

二つの問題に回答しよう。質問者一…あなたの講義は何故短篇小説にしか触れないのか？（A）それは授業というものの特質によって決定されたからである。一回の授業は二時間しかなく、それは短い。私はその時間が一つの短篇小説の作品を分析するのに適していると思う。質問者二…なぜそんなに話が多いのか？ 小説は一

千字ほどしかないのに、どうして一気に一万字くらいの内容話すのか？（A）それも授業というものの特質によって決定された。一回の授業は二時間にも及ぶ。それは長い。私は「この小説は非常に良い」と言って、それで終わりにするわけにはいかないだろう。<sup>16</sup>

一見ユーモアにあふれる質疑応答であるが、その背後には、畢飛宇が『小説課』の特色に対する自己弁護または持論が潜んでいる。後の『中華読書報』のインタビュー記事にも次のような箇所がある。

記者…『小説課』の中に、私は言葉遣いに強いこだわりをもつ畢飛宇の自由奔放な一面を初めて見た。例えば、「何が偉大なのか、さっぱりわからん」、または「飯に行こう」などのような口語的な言葉が見られる。授業だからこそ、このようなありのままの様子を保持するの  
か？

畢飛宇…それは私が意図的に保留した。この講義原稿が『鍾山』で発表される前、編集者の賈夢璋が私に電話をよこして、やっぱりこの点について指摘した。その口語的な言葉遣いをやめるようにと説得しようとしたが、私はそれを受け入れなかった。——それこそ『小説課』である。それは授業から生まれ、教室から生まれたもの

である。私はその臨場感を伝えたい。<sup>17</sup>

『小説課』の批評対象の単一化にしても、批評の表現に見られる口語的な言葉遣いや、散漫な形式にしても、それは事前の緻密な編集から誕生したのではなく、授業の講義原稿そのままを母体として生まれたものである。洗練さの稀薄さがかえって、読者に文学授業の「臨場感」を伝えることになった。従来の「観念から文章を起こす」という創作談や読書筆記と比べて、授業式の批評は「声のある講義」というプロセスを挟むため、講義の直後に批評が成立するという「講義録」の形を呈している。

畢飛宇の『小説課』は特別講義の原稿を連載しただけのものである。そのような特性がある故、本格的な専門講義ではないというなら、王安憶によって出された『小説家の十三堂課』及びその続編『小説家の第十四堂課』は駐在作家による文学講義が「現場」での使命を全うした後、授業の「副産物」として批評界へ踏み込んだ典型的な例である。

『小説家の十三堂課』はそのタイトルが示すように、もとなつたのは王安憶が復旦大学に駐在した際に行った講義の原稿である。「授業」という特色を強調するため、王安憶はその本の序文に相当する部分の「復旦大学小説学カリキュラム」において、「この講義はある問題を解決しな

ければならない、それは小説の目的である」と語っている。つまり「小説はなにをするものなのか、小説の理想を確立させねばならない。小説の理想とは、言葉を材料とした物語という形式をもとに、心の中の世界を構築すること」だと王は述べた。王安憶は一三回の授業中、数篇の名作を例として、小説の表現、感情、動機、主題、精神、さらに小説家の特性などの側面から小説が持つ内なる世界と我々のいる外部の世界との関連性を説明した。またその講義からは、王安憶が持つ文学創作や文学教育に対する考えも明らかになった。続篇の『小説家の第十四堂課』は王安憶が二〇一四年五月に、台湾「余光中人文講座」からの要請を受け、高雄中山大学で開いた三回の文学講座の内容がもとになっている。テーマは前と同じく小説を主題として展開された。第一回の内容は、黃錦樹と駱以軍との対談の形で「小説の機能」について討論したものである。第二回の内容は、王安憶が自分の経験に基づいて「小説の論理」について語ったものである。第三回の内容は、詩人余光中との対談の形で、マルクス、張愛玲、沈從文などの作家の創作を通して、「物語と主題」について討論したものである。

小説を鑑賞する類の講演ではなく、小説理論をテーマにして講演したのは、王安憶が大学で教えた経験に基づいて、小説創作と文学批評に対して意識的に検討を行ったた

めである。一九八〇年代初期、彼女はすでに小説を實在の対象として系統的に研究しなければならないと提起した。「小説を書くのは、感情と心の労働である。だが、小説を書くことは一種の科学でもあり、理性的な労働でもあると私は思う。私は非文学的な目で生活を見るように努力する」<sup>(19)</sup>。そして、伝統的な中国の文学批評に関しては感性的な態度を持っているものの、理性的な伝統が欠けているため、小説の内部に潜む規律に触れることが難しいと彼女は指摘した<sup>(20)</sup>。王安憶にとつて、小説の創作における技術性と科学性をはじめて認識したのは、彼女が一九八三年にアメリカのアイオワ大学へ赴き、そこで四カ月及ぶ「駐在作家創作プログラム」に参加した経験と強く関係している。アメリカの大学の旅は、中国と異なる作家の養成方法や科学的な訓練を体験させ、彼女に小説とその創作技法について理性的に考える機会を与えた。特に小説創作の職業化、批評の科学化による潜在的思考を身につけた。復旦大学で自ら小説理論の授業を開くことは、まさに王安憶における理論分析を特色にした批評方法の試みである。この理念は「第一堂課——小説的定義」の中で彼女が次のような大胆な宣言を行ったことによっても明らかである。

私は何故講演ではなくこの授業を開いたのかを説明したい。多くの大学または文学サークルは私に講演の要請

を出したが、私はすべて断った。しかし復旦大学のお招きを受け入れ、ここで長い時間を費やして、授業を開くことにした動機はなにか？（中略）文学は専門職である。それはその独自のことわりを有する。また、特定の技術と技巧を要する。私はここで、その技術の問題に触れたい。私のこの提議に反感が寄せられることを恐れな<sup>②</sup>い。私ははつきり言おう。私が今日ここで講じるのは技術の問題だ。

したがって、王安憶の『小説家的十三堂課』及びその続編『小説家的第十四堂課』のような評論集は、彼女が感覚的な批評方法から脱却し、科学的な姿勢で小説を客観的な対象として研究し、理性的な分析を特徴とした批評を形作るための試みであった。

ここまで見てきた通り、作家の経歴、またはその文壇に対する考えは大学の授業において、すべて貴重な研究資料と学生たちの学習経験の源になり得る。そして、教育の現場で行われた講義が出版され、大衆の目に触れた時、読者はその著書を通じて授業に参加し、作家の創作経験を表した授業の内容を体験することによって、幅広い知識を得ることができ<sup>③</sup>る。学生の視点から見れば、駐在作家の授業は至近距離で文学に親しむ「臨場感」を提供してくれる。一方、作家の視点からは、王安憶が「宣言」したように、駐

在作家は大学での授業を開講することによって、自分の文学創作を同時代の作家たちの作品や、各時期の名作と平等に扱うことができるうえ、自身の視点から客観的に比較することができる。駐在作家たちは文学的な表現と科学的な方法で、授業において「口頭」でその感想を述べるわけだが、作家と学生が語り合うことすなわち両者の双方向的な交流が、文学批評を実現する「場」を作り上げるのである。

## (二) 批評としての文学選集

近年、文学研究の歴史化への転向によって、批評家たちは徐々に社会史、思想史、文化史から文学史に対して関心を寄せるようになった。一方で、学者は文学を社会における思潮の変遷を解明する「道具」として扱い、文学作品自体への関心が薄まりつつある。それと対照的に、多くの出版社は近年積極的に大学「教師」の兼業作家を招いて、文学名作の選書作業を行い、様々な読者を対象とする「文学選集」を編集するようになった。文学作品を伝播する媒体であると同時に一種の批評でもある「文学選集」は、批評の現場と文学史を連結させうる。事实上、選集による批評は中国古典文学批評の歴史の中で広く用いられてきており、現代に至っても強い影響力を持っている。例えば、曹文軒の『二十世紀末中国文学作品選』は選集式批評の代表的な著書である。作家駐在制度の普及によって、駐在作家

たちが文学選集の編集に携わる傾向も徐々に定着しつつある。

二〇〇二年一月、上海大学文学学院院长を務めた作家葉辛は鉄凝、王安憶、蔣子龍を客員教授として招き、文学教育向きの二十世紀現代文学の選集を編集させた。その目的は「可能な限り、客観的かつ公正に二十世紀現代文学の真の姿を反映させる。文学に対する作家の独自の理解によって、文学の教育に役に立つて欲しい」という主旨であった。以前は、現代文学教育に使われる文学選集の大半が教育の第一線で活躍する学者たちによって編集されたものだった。葉辛が上海大学の駐在作家を集めて文学専門教育用の選集を編集させることは、作家による集団的な文学選集の編集を実践する試みであり、作家駐在制度の下で行う文学教育の改革でもあった。一方、それに参加した作家たちの各時期の名作に対する理解と判断も選択標準によって明らかになった。同時に、文学選集が持つ批評の側面もそれによって顕著になった。

それとともに、作家たちの影響力を借りて、中信出版社は二〇一六年に、著名詩人である北島を編集長として招き、「子供たちへ」シリーズの選集を世に送った。シリーズの第一冊目である『給孩子的詩』は、北島に選ばれた一〇一首の様々な特徴を持つ詩歌によって構成される。詩人、作品数、翻訳などについての選択基準は、すべて編集

者としての北島の詩に対する理解と美学理念を反映した。このシリーズの第八作目の『給孩子的故事』は復旦大学の駐在作家である王安憶によって編集された。彼女は文体の制約を排除し、長年の文学創作と教育経験に基づいて中国現代文学をもっとも代表する名作の中でも子供たちにふさわしい二五の短篇小説と散文を厳選して編集した。王安憶の選択は明確な基準を有しているが、それは決して思想を教え込むためのものではなく、家族、友情、成長に関する物語を伝えることによって、子供たちに読書を楽しませると同時に、心の感動を体験させるためのものである。『南方週末』のインタビュー記事において、彼女はその考えについて次のように語った。

この選集にはやはり私の小説、特に子供たちにふさわしい小説に対する考えをはっきり反映させました。これらの小説は独特な、文学性が強いものです。本来は子供向きに書かれたものではありません。我々がよくいう児童文学の「子供っぽさ」が見られません。中国人は文学選集を文学批評の一種であると考えています。これは興味深いことです。その編集作業を任された以上、必ず私の個人的な選択基準を反映させなければなりません。

このシリーズは著名作家による選集であるため、信憑性

があると思われる。また、これらの選集は教材として普及するなかで、復旦大学「教授」による選択の正当性や文学性はより確実なものとして認識された。それは駐在作家によって編集された文学選集が、文学教育の価値だけではなく、明確な選択と判断を有する文芸批評でもあることを示唆する。

## おわりに

「大学駐在作家」の批評を文芸批評の歴史において如何に位置づけるのか、それは本論文の目的ではない。しかし、認識しなければならぬのは、作家の「大学駐在制度」が作家の批評活動に新しい特質をもたらしたからこそ、「作家批評」が学術界、出版界、教育界及び一般読者に認められたという事実である。私見によれば、この新しい特質は主に二つの側面に現われている。

その一は、教師と作家の二重の身分の存在によって、「作家批評」は学術性の単純さかつ無味から脱却し、実践的な価値を獲得するようになった。より多くの文学者たちが次第に駐在作家となり、教師として大学で教育の仕事に携わった。そこで、彼らは文学創作と同時に批評活動も展開し続けた。このような「創作」と「批評」との連動によって、彼らの批評も創造性の強い文学作品としての一面

を呈したのである。一方「教育」と「学習」との連動は、彼らに「実践性」を教育の基準とさせ、学生―作家―評者を連携させた。そこで創作と批評の隔たりを打破し、双方向のかつ平等な交流と対話を実現させた。授業での駐在作家たちの講義は私的で個性の強い批評であるが、単行本として出版することによって、それは全国に伝播することができた。つまり、他の大学の学生を含む、数多くの読者がそれを学ぶ機会を得たのである。それは名門大学内部の授業の枠を超え、全国に普及できる実践的な教育として、将来的可能性を秘めているよう。

その二、駐在作家の文学批評は出版メディアの宣伝によって普通の読者にも受け入れられるようになり、読書を楽しむ民衆にも影響を及ぼした。この現象は「大家談大家叢書」の主な目的でもある。「もつとも多くの一般読者に読書の楽しい経験を提供し（中略）これは多くの一般読者にとつて、人文的素養を充実させ、文章力を向上させるだけではなく、民族文化の素養を高めることにもつながる」。駐在作家の批評活動はより広い視野で文学教育のありかたについて考えると同時に、文学批評を現実に取り戻し、確実に人々の日常生活に浸透させることにつながる。このような伝統的なアカデミーの批評に対する「再構築」によって、駐在作家の文学批評はより親しみのある形式で今日の社会へ伝播することができよう。

文学批評がもし引き続き社会の現実を無視し、自己満足に陥るなら、それは學術概念の牢獄と化すしかない。その現状を改善するためには、評論家たちが大衆に文学と芸術に関心を寄せる意義を伝えなければならず、またその豊かな文学経験と緻密な感受性をもって、大衆の美学意識を導く必要があると思われる。この意味において、作家の大学駐在制度を通して行われた一連の授業、読書会、文学選集などの実践的活動は、今日の文学教育の改革や文芸批評による文化伝播に対して、新たな経験と方向を提示したと言えるよう。

〔付記〕本稿は武漢大学国際合作培育プロジェクトによる研究成果の一部である。本稿の草案段階で貴重なコメントをくださったハーバード大学の王徳威教授、そして日本語の添削を引き受けてくださった鳥谷まゆみ先生、田村容子先生に感謝申し上げる。

## 注

- 〔1〕劉曉南『第四種批評』（北京大学出版社、二〇〇八年）を参照。
- 〔2〕近年、武漢大学の葉立文は残雪、余華、格非等の新銳作家たちの文学批評活動について継続的な研究を行った。代表する論考に、「延伸與轉化——論先鋒作家的『文学筆

記』（『文学評論』二〇〇六年第一期）、『經典的復述與重寫——論殘雪的『文学筆記』創作』（『貴州社会科学』二〇一〇年第五期）、『復述』的芸術——論当代先鋒作家的文学批評』（『文学評論』二〇一二年第四期）等がある。

〔3〕〔法〕アル貝・蒂博代『六說文学批評』趙堅訳、郭宏安校正、生活・読書・新知三聯書店、二〇〇二年（Albert Thibaudet, *Physiologie De La Critique*, Paris: Éditions de la Nouvelle revue Critique, 1948）を参照。

〔4〕張光芒『文学批評中作家』創作談』的合法性問題』『首都師範大学学报（社会科学版）』二〇一七年第二期。

〔5〕前掲『復述』的芸術——論当代先鋒作家的文学批評』。

〔6〕丁帆、王堯『建構生動有趣的全民閱讀』『小說課』人民文学出版社、二〇一七年、二、三頁。

〔7〕舒晋瑜『駐校作家制度能否推動大學教育變革』『中華読書報』二〇一七年五月一〇日。

〔8〕陳香『中國人民大學正式建立駐校作家和駐校詩人制度』『中華読書報』二〇一〇年一〇月三日。

〔9〕舒晋瑜等『駐校作家、干的是啥？』『江南』二〇一八年第三期。

〔10〕前掲、舒晋瑜『駐校作家制度能否推動大學教育變革』。

〔11〕羅振亜『詩人與校園遇合』『中國現代文學研究叢刊』二〇一五年第四期。

〔12〕遲子建『額爾古納河的右岸・跋』『額爾古納河的右岸』北京十月文芸出版社、二〇〇五年、二五九頁。

〔13〕王貴祿『文学在場學——一種建構馬克思主義文芸學之

- 「中国話語」の觀念與方法」『四川大学學報（哲學社會科學版）』二〇一八年第一期。
- 〈14〉 靳曉燕「作家「入駐」校園文學教育的沖擊波」『光明日報』二〇一二年二月一七日。
- 〈15〉 魏沛娜「專訪知名作家畢飛宇——寫小說是可以教的」『深圳商報』二〇一七年七月二三日。
- 〈16〉 畢飛宇「『小說課』後記」『小說課』人民文學出版社，二〇一七年，一九九頁。
- 〈17〉 舒晉瑜「畢飛宇——我怎樣讀小說」『中華讀書報』二〇一七年三月八日。
- 〈18〉 王安憶「小說家的十三堂課」上海文芸出版社，二〇〇五年，一頁。
- 〈19〉 王安憶「掃去來兮」『獨語』湖南文芸出版社，一九九八年，二七頁。
- 〈20〉 王安憶「漂泊的語言」作家出版社，一九九六年，三六八頁。
- 〈21〉 前掲、王安憶『小說家的十三堂課』一一四頁。
- 〈22〉 姜衛紅「葉辛——葉落海上任」『蹉跎』『北京文學』二〇〇一年第八期。
- 〈23〉 宋宇「要的是天真，不是抹殺複雜性的幼稚」——王安憶和『給孩子的故事』『南方週末』二〇一七年五月二五日。
- 〈24〉 前掲、丁帆、王堯「建構生動有趣的全民閱讀」二頁。